シリーズ われらイキイキ専修人

絵本作家・イラストレーター etc.

森本紗也子さん

東京都足立区綾瀬の喫茶店蘭蝶にて

いつも心は連想ゲーム。湧き出る想像を絵とストーリーに。

専修大学での大学生活をイメージして、今号の表紙のイラストを描いてくれた森本紗也子さん。イラストを描くようになるまでのこと、専修大学の思い出など、いろいろとお伺いした。東京から石川へ引っ越す直前のインタビュー。新天地での生活ついて、驚きの話も飛び出した。

もりもと　さやこ

1989年東京生まれ。2008年専修大学附属高校卒、2012年専修大学文学部人文学科歴史学専攻卒業後、インフラ関連会社に就職。2017年に退社し、絵を学ぶ。電子書籍『かわさんいつもありがとう』（信出版）など発売中。今年4月より石川県加賀市に移住。

大学を卒業し、一般企業で事務職として働いていた森本さん。職場は明るく、人間関係にも恵まれていた。それでもあるとき、ふと心に浮かんだ思いがあった。「このまま死んでいくのかな。自分にしかできないことって、なんだろう。絵本を描きたいな」

そう思い立ち、会社を辞めて、絵の専門学校へ。27歳のときだ。

子供の頃から絵を描くのは好きだったが、習ったことはなかった。絵具や色鉛筆など画材の使い方から学び直す日々は、発見の連続で、新鮮だった。

絵の題材には事欠かなかった。例えば「ケーキの上のイチゴが、ケーキを食べていたら？」とか、「新幹線の名前ははやぶさ、こだま…じゃあ『かめ』ってのがあったら？」。そんな想像をかわいらしく絵にすると、友人や先生たちは面白がってくれた。

「技術はまだまだ。でも、発想が面白い」

ある先生の後押しもあり、絵本を出版することに。何度も描き直して、2018年に完成させたのが絵本『かわさんいつもありがとう』（信出版）。果物の皮がもしなくなったらどうなっちゃうのか――そんな豊かな想像力から生まれた一冊だ。

子供の頃から貫く、自分らしさ

「ややこしい子でした」

幼少期をそう振り返る。幼稚園では、先生に「縄跳びはこう結んで片付けようね」と教えられても、「明日また使うから」と結び方を覚えようとしなかった。はないちもんめは「なんか変な遊び」と、輪に入らなかった。その一方で、コマは回せるようになるまで飽きもせず、ずっと練習し続けた。

↑学生時代、江戸時代に流行した伊勢神宮へのおかげ参りについて卒業論文を書き、そのお礼参りに行った

←依頼を受け作成したお弁当チラシ

↑カレンダーも作成して販売

「一応、自分の中ではちゃんと理屈があるんです。でも、それを人に言うことはなかったので、きっと“マイペースな子”と思われていたと思います」

専修大学附属高校から専修大学文学部へ進学。日本史が好きで、歴史学を専攻した。大学ではかけがえのない仲間と出会えた。

「授業やゼミなどでできた友達との日々は、本当に楽しい思い出として残っています」

でも、卒業してから会う機会はないそうだ。そして、こんな話が続く。

「夏目漱石の『坊ちゃん』って読まれましたか？最後、坊ちゃんと山嵐が赤シャツを成敗したあと、『山嵐とはすぐ分かれたきり、今日まで逢う機会がない』ってあるんですが、そんな感じかも」

仲間と過ごした輝かしい時間は、その後たとえ会う機会がなくとも、色褪せることはないのかもしれない。

漱石の作品以外にも、『赤毛のアン』など、大学では多くの本に触れた。授業においても、印象に残る内容のものが多かったそうだ。

「授業では、江戸時代の木版印刷について教わったことも印象に残っています。実際どのようなものなのか見せてもらい、その技術の高さを知りました。先生の雑談から学ぶことも多く、授業をさぼっていたら一生知らなかったようなことも多いです」

好奇心で世界は広がる、絵と…エトセトラ

会話の中で出てきたひとつのフレーズからの連想が、

↑↗→電子書籍『かわさん いつもありがとう』（信出版）の表紙と冒頭。このほかにも２冊の絵本が出版されている。

頭の中でどんどん広がっていくという。まるで連想ゲーム。その想像力は、きっと絵本づくりにも生きている。

絵の学校を卒業した後は、オーガニックレストランや料亭でアルバイトをしながら、絵本制作に取り組み、個展や友人との二人展なども開催してきた。そうして少しずつ、イラストの仕事が舞い込むようになっていった。

「どんな図柄で、どんなタッチにするか。相手の要望を丁寧に聞いて、できるだけ手間を惜しまないようにしています。心を込めないとだめだと思っていて、下手でも一生懸命書いた絵の方が人に伝わるし、自分も納得できます」

イラストレーターとしてオーダーに応じた絵を仕上げる。それと並行して、自らの作品世界、新たな絵本の構想も練っているという。そして、驚きの話が飛び出した。

「絵の仕事はずっと続けていきたい。そして、それ以外にも、いろいろやりたいことがあります」

子供と関わるのが好きで、保育系の専門学校に２年間通い、この春、保育士の免許を取得。また、食の安全にも関心を持ち、その勉強もしている。

インタビューしたのは３月末。東京から石川に引っ越す前々日。向こうでは、絵を描きながら、保育士として働く。そして、保育園にある畑で無農薬農業の手伝いもするのだと目を輝かせた。

春から夏へと季節が移り行く頃、森本さんに依頼した『育友』の表紙用イラストがメールで届いた。ラムネ瓶から弾けるように飛び出すのは、勉強、スポーツ、アルバイト、就活、旅――大学生活を象徴するさまざまなもの。添えられたメッセージには、新天地で奮闘する様子が、短くつづられていた。